

ミステリ読書案内

2022. 12. 7 発行元

第424号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回もシリーズものの最新刊を取り上げた形になる。少しずつ話が前に進むのが楽しみ。登場人物に馴染みができているのでスムーズに読めるものばかり。

『リレー長編』について

今回は『リレー長編』について書こうと思う。『リレー長編』とは、何人かの作家が順次引き継ぎをしながらひとつの作品に仕上げたものを指している。『ネメシス』シリーズが完結したので、それに合わせて触れてみることにした。

『ネメシス』シリーズは6人の作家が書き継いだことになる。藤石波矢が柱になるストーリーを考えたのかな。異なる作家にリレーしていく場合、全てを任せてしまうと結末

に行ってもまとまりがつかなくなる恐れがある。どこまでを意思統一しておくかが難しい。

起源はイギリスのディテクション・クラブが1931年に企画した『漂う提督』で、序はセイヤーズが書き、プロローグはチェスタトンから始まる。クリスティやクロフツも参加している。豪華メンバー13人によるリレー。出来の方は…まずまずと言ったところかな。私は『ハヤカワ・ミステリマガジン』の連載で読んだ。また、同様の方法で『ザ・スクープ』という作品もある。

藤石波矢『ネメシスVII』

10月に講談社タイガから出た本。シリーズ完結編がやっと出版された。随分間が空いてしまった。ここまでの流れを半分以上忘れかけていた。登場人物の名前と関係性を思い出すのに10ページ以上かかる有様で…。完結編らしく、物語の半ばには美神アンナの出生の秘密などが提示される。20年前の出来事が判明し、ようやく本筋の流れに沿った展開になる。併せて、所長の栗田と探偵コンビの風間が今まで明確にしてこなかった事情も説明され、敵味方が鮮明になっていく。「こんなに年齢の差があったのかあ…」ここまでは脇道に逸れる話が多かったのだ。最後は映像向きのアクション続きの場面になり大団円を迎える。

澤村御影『准教授・高槻彰良の推察 呪いの向こう側』

10月に角川文庫から出た本。シリーズ第8巻。話し手の大学生・深町尚哉が抱えている課題も民俗学の准教授・高槻彰良の後に隠れているものの姿もなかなか見えてこない。深町は他人の嘘を聞き分ける耳を持つための苦勞であり、高槻は鳥恐怖症で時々別人格が表に登場する謎である。今回も3つのエピソードを繋ぎながら、ゆっくり進行。一つ目は小学校での「かごめかごめ」から始まった不登校児童の話す「モンモン」というお化けに関する問題。小学生の心理としては十分にありうることだろうと思う。深町の小学校時代の振り返りも交えて…。このシリーズ、だんだんミステリの要素は薄れていき、ホラーの領域に入り込んでいくようだ。

梓林太郎『松本-日本平殺人連鎖』

10月にトクマノベルスから出た本。『人情刑事・道原伝吉』シリーズの書下ろし最新刊。梓林太郎は元気だ。衰え知らずでマイペースで原稿を書き続けているようだ。若い時の作品と同じレベルの内容に仕上げるところがさすが。本書は松本市内での放火事件が発端。その後殺人事件へと発展していく。静岡・日本平での過去が原因になっているらしい。中ほどくらいまで進むと事件の底ははっきりしてくるのだが、当事者側からの視点も描いてストーリーに深みを持たせている。さまざまな人生を描くのが作者の特徴であり、道原伝吉に相応しいもの。

渡辺裕之『911代理店4 ビヨンド』

10月にハルキ文庫から出た本。シリーズ4冊目。これまであまり目立たなかったシリーズだが、本作は楽しく読ませてもらった。「解離性同一性障害」のテーマが上手に取り上げられていると感心した。「911代理店」はあらゆるトラブルに対応して解決をめざすという民間企業。元警視庁捜査一課刑事の岡村が社長を務めているが、物語は探偵部に所属する神谷の視点で描かれている。6人のメンバーの中で、昼の間は事務の仕事をしている篠崎沙羅は解離性同一性障害で、夜になると凄腕ハッカーの玲奈に変わり、これまでも事件の解決に大きく役立ってきた。今回は、朝になっても沙羅が出てこないで、玲奈がパニックに陥り、神谷が必死に助け出そうとするストーリー。沙羅が子どもの頃に体験したことが元凶で、母親……との関係性を含めて、過去を探る活動になる。大麻の密輸事件も並行していて、所員はフル回転で動かなければならない。精神の底にあるものを求めていく作業は未知の世界であり、ギリギリのラインが迫ってくる。